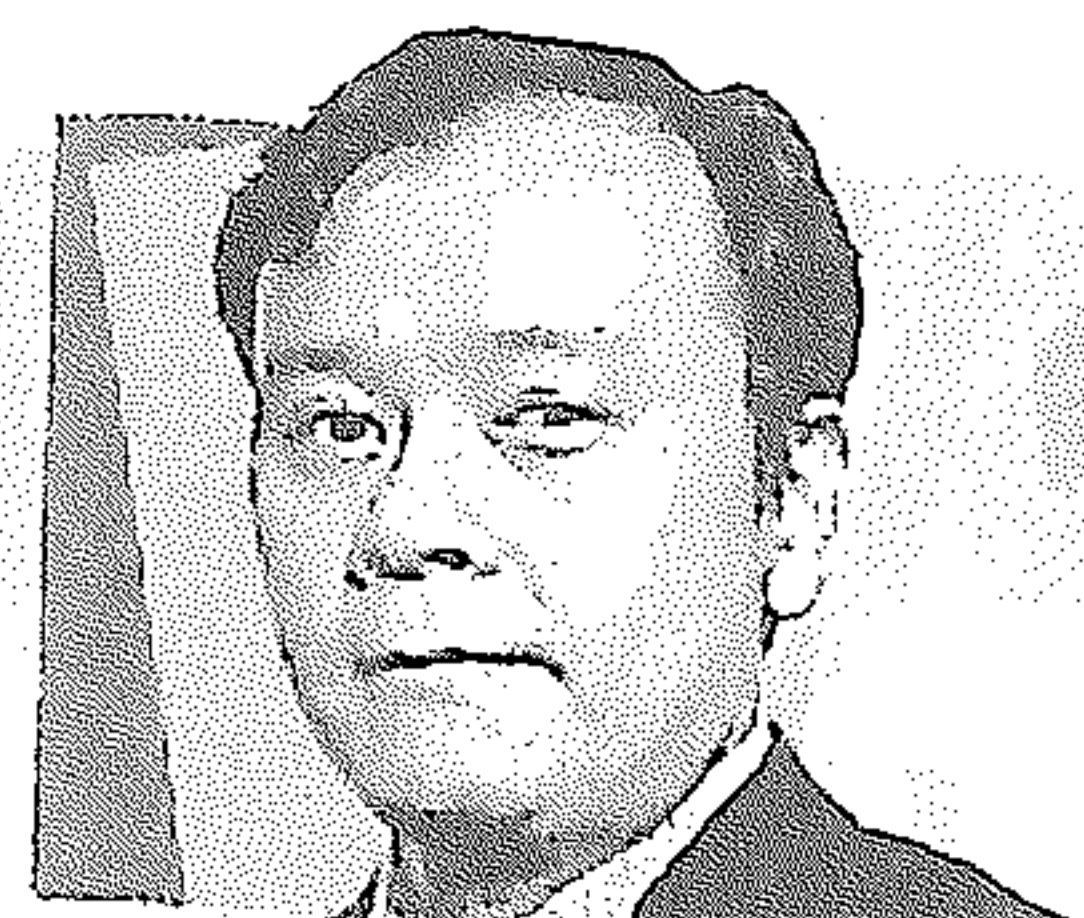




反対者の声に向き合っていますか？

安保論戦が繰り広げられている衆院特別委員会で、民主党の辻元清美衆院議員の存在感がきわだっている。

先月末に「早く質問しろよ」と安倍晋三首相からヤジられただけではい。首相がいない一般質疑でも閣僚らを攻め続け、疑問や矛盾を次々と浮かび上がらせるニュースメーカーぶりである。

「憲法違反」との立場から、安全保障関連法案の撤回を求める先頭に立つ。さぞ意気が上がっているだろうと思って辻元氏を訪ねたら、だいたい浮かぬ顔をしていた。

「アニメ映画の『千と千尋の神隠し』の力オナシみたい。どこから攻めても、政府は決まり文句をレコードのように繰り返すだけで、議論がかみ合わないんです」

「力オナシ」は黒い体に白いお面をつけ、だれかの言葉を借りないと話せない謎のキャラクター。対話不能の相手と戦っている感覚らしい。

見えていても、歯がゆい場面は多い。野党はあれこれ質問するが、政府側は正面から答えないまま時計の針が回る。

安倍政権は憲法や国会を軽んじているというのが、辻元氏の言い分。人を見下すかのように放たれた安倍氏のヤジは、その象徴として彼女には聞こえていた。

「『本性見たり』という感じでしたよ。私が人の命について話しているときに、ヤジでさえぎった。そんなことはどうでもいいから答弁させろというわけですよ」と、いまだ怒りはおさまらない。

政府は国会に法案審議をお願い

する立場。委員は自由に質疑して意見を言っていると、衆議院規則にはつきりと書いてある。「政府はごうまんて高圧的。自民党は官邸翼賛会。反対者の意見も聞こうという姿勢がない。私が女やから言うんかとも思う。共産党の志位（和夫）さんには『早く質問しろよ』なんて言わないでしよう？」

辻元氏には追い風も吹く。衆院憲法審査会で自民推薦の憲法学者が法案を「違憲」と言い、法案反対の声が多くの識者に広がっている。だが、定数45の特別委は自公32人に対し、民主は7人と少ない。自民席からは罵声を浴びる。

「空気が悪くなるとカナリアが死ぬっていうけど、委員会にいますだけで息苦しい」と、こぼしてもいた。

辻元氏は市民運動出身だ。護憲の社民党から「土井チルドレン」として1996年に初当選。以来、紛争地帯をめぐったNGO活動の経験をいかし、市民目線の安保論戦に挑み続けてきた。祖父・岸信介元首相を敬愛して国家を重んじる安倍氏とは、対極の政治家だという自負がある。

「私の祖父は戦死した。だから私は戦争に行かされた側。でも夢見る乙女の平和主義者じゃないよ。米国と一緒に武力行使をする国か、人道支援や紛争予防をする国か、どちらを選ぶのかと言いたいです」と闘志を燃やす。

ネタを入念に仕込み、相手を挑発しながら見せ場をつくる「辻元流」。安倍政権が反対者の声にどう向き合っのか、注視したいと思う。